

新刊紹介

シーリン『清代外モンゴルにおける書記 および書記の養成に関する研究』

広川 佐保

本書は、現在内モンゴル大学で教鞭を執るシーリン氏が、神戸大学に提出した博士論文をもとに、中国内モンゴル自治区の出版社から日本語で刊行したものである。本書が課題とするのは、清代モンゴルの行政システムを根幹から支えた書記の成立過程から、養成課程、そして書記たちが社会変革において果たした役割を、文書史料から解き明かすことである。近年のモンゴル国のアーカイブ史料公開は、モンゴル史研究の環境を大きく変化させている。シーリン氏もまた、モンゴル国における史料調査によって多くの重要な史料を発掘し、本書にその成果を反映させている。著者が述べるように、清代モンゴルの文書史料は、そのほとんどが書記によって作成された公文書である。モンゴル史研究において、これらの文書が重視される一方で、その編纂を担った書記に関する研究はほとんど進んでいないというのが現状である。また、書記たちは、清代からボグド・ハーン政権期にかけて、歴史的に重要な役割を果たすとともに、文化的活動にも大きく寄与した存在でもあった。その歴史的意義を読み解くのが本書の課題である。

本書の構成は以下の通りである。

序章

第一章 清朝とそのモンゴル統治

第二章 清代外モンゴルにおける書記の養成

第三章 清末のモンゴル人書記

第四章 清末の書記出身者の近代モンゴルにおける活躍

第五章 清代の書記養成制度が近代モンゴルの教育に与えた影響

終章

まず序章では、書記に関する先行研究と史料状況を整理したうえで、本書の課題について説明する。これまで書記に関する研究は、文書史料の公開が最近まで進まなかったこと、またハルハ・モンゴル研究の関心が政治史や法制史、社会制度史、官制史に集中していたことから、十分に進展してこなかった。しかしながら、著者が述べるように、書記たちは、清朝支配下におけるモンゴルの文書行政を担い、かつ近代以降、歴史の重要な局面を支えた存在

であった。それを踏まえたうえで、本書で用いる史料と構成について述べる。

第1章「清朝とそのモンゴル統治」では、清代モンゴルにおける盟旗制度や身分制度にかんする概略が述べられたあと、清朝統治下における中国全土、およびモンゴルにおける文書行政システムについて説明がなされる。清朝時代、「筆帖式」という官職が中央や地方の行政機構に新たに配置されたが、その言葉は、満洲語の書籍や文書を意味する「bithe」に由来していたという。筆帖式は、八旗出身者からなり、主に満洲語と漢語の翻訳、浄書、檔案管理、文書の通送などの業務に携わった。また同時に清朝は、モンゴル地域を統治するにあたって、皇帝、理藩院、駐防官、盟、そして旗のあいだを行き交う文書行政の枠組みを作り上げた。それぞれの役所では、上級、下級の役所へ連絡や通知を行うさい、満洲語やモンゴル語で公文書が作成され、場合に応じて相互に翻訳された。そのさいモンゴルにおいて文書行政を現場で担ったのが、書記（bičigeči）と呼ばれる書記である。これらの書記は、清代モンゴルにおいて、旗や盟の役所、そして庫倫辦事大臣衙門において養成され、文書行政の一端を担うとともに、社会のなかでエリート層として重要な位置を占めるようになる。

第2章「清代外モンゴルにおける書記の養成」では、トシェート・ハン部の事例をもとにモンゴルにおける書記養成システムの開始から近代までの推移について明らかにする。文書史料に基づけば、おそらくトシェート・ハン部の各旗では18世紀後半から旗において書記養成が開始されていたとみられる。各旗では、聡明、かつ年少の男子を印務処（旗の役所）に集めてモンゴル語の読み書き能力を訓練したが、そのさい重視されたのは、身分よりも学習能力であった。さらに旗を統括する盟、および盟以上の上級機関では、モンゴル語にくわえて満洲語の読み書き能力が求められた。なお盟では、旗とほぼ同時期か少し後に、書記の養成が開始されたが、盟の見習い書記たちは、旗の書記養成対象者から選ばれたという。これら盟の見習い書記は、彼らの出身旗から3ヶ月分の生活費が与えられ、訓練を受ける手はずとなっていたが、それは旗にとって大きな負担であり、後に停止に至った。なお、盟と同じく、清から派遣された大臣が常駐する庫倫辦事大臣衙門でも、書記の養成所が設置されたが、その見習い書記の生活費は、出身旗が負担することとなっていた。

1898年10月、庫倫辦事大臣衙門（在イフ・フレー）には、新たに「満漢文学校」が設立され、漢語のできる書記の養成が開始された。その背景には、モンゴルにおける漢人移民の増加や満洲人官僚の満文能力の低下があったとされる。この満漢文学校の生徒は、旗や盟の書記のなかから選出され、そのうち優秀なものには、大臣衙門の見習い書記へ採用される道が開かれ、また官位へ昇進する事例もあった。なお、学校の維持費用はトシェート・ハン部とツェツェン・ハン部が負担するなど、公的負担が基本であった。後の1909年、満漢文学校は「教養学校」として発展的拡充を遂げることとなった。本章で指摘されるように、旗、盟、庫倫辦事大臣衙門の書記は、身分にとらわれず、かつ形を変えつつも公費負担によって養成され続けた。また、書記昇進制度は、世襲王公が支配し、科挙制度が存在しないモンゴルにおいて、一般モンゴル人に開かれたわずかな出世ルートでもあったのである。

第3章「清末のモンゴル人書記」では、トシェート・ハン部ゾリクト王旗の書記の事例をもとに、その生活や勤務の状況、昇進の過程などを具体的に検討し、書記の実像に迫ろうとする。清末、印務処には、様々な役割を担う役人と書記、すなわち大書記、協理書記、見習い書記が置かれていた。一番下級の見習い書記は、毎月銀5銭の手当を貰い、旗の印務処で公文書を書き写し、檔冊に装丁する作業を行いながら修行を積んだという。さらに見習い書記から協理書記へ昇進すると、毎月銀2両の手当を受けて、文書の作成や税金の徴収、比丁冊の作成など様々な仕事に携わるようになった。また旗の協理書記から盟の駐班(盟の役所)の協理書記に任命(派遣)される場合もあり、そこでも膨大な文書の作成に関わった。こうして協理書記が経験を積み、文書行政に精通するようになると、次の駐班では大書記に昇進することもあった。大書記には、毎月60両が支給されたが、これは当時としてかなりの高給取りであった。書記に対する手当は、時代や地域によって異なるが、いずれにせよ当時のモンゴル人にとっては憧れの職業であった。一方、書記の業務において、書き誤りは厳しい処罰の対象であり、厳密さが求められる。以上のように、本章では清末の書記の暮らしぶりや昇進などをリアルに描き出すと同時に、盟や旗の役所の機能も明らかにしている。

第4章「清末の書記出身者の近代モンゴルにおける活躍」では、清朝が崩壊し、あらたにボグド・ハーン政権が成立したさい、書記たちがどのような活躍を見せたのか、伝記や回想録をもとに検討している。ここで取り上げられるのは、ジャミヤン(財務省副大臣、典籍委員会総裁)、マグサルジャブ(人民政府法務大臣)、ナワーンナムジル(人民政府筆頭書記官)、アマル(内務大臣、総理大臣)、デンデブ(科学委員会総裁)など、近代モンゴルの政治を牽引した著名な政治家たちである。彼らは、いずれも清末の旗や盟の役所において、書記として勤務した経験を持ち、さらにいえばアマルを除く4人が平民出身であった。独立宣言後のモンゴルでは、新しい政治体制が敷かれたものの、行政機構や文書行政はこれまでとさほど変化はなかったと筆者は指摘する。それゆえ文書行政や法制度に精通し、実務経験を持つ彼らは、引き続き官僚として活躍の場が与えられたという指摘がなされる。

第5章「清代の書記養成制度が近代モンゴルの教育に与えた影響」では、清朝の崩壊とともに、終焉を迎えた書記養成制度が、その後のモンゴルの学校制度にどのような影響を及ぼしたのかが検討される。ボグド・ハーン政権の成立後、通訳や翻訳官の養成を目的として、外務省や内務省の主導により、フレーに外務省附属学校が設立された。なお、著者は2章で取り上げた教養学校が附属学校に継承された可能性も指摘している。附属学校では、モンゴル文字やロシア語などが教授され、各地から学生が集められたが、旗から見習い書記が派遣された場合もあった。後に附属学校の生徒の一部は、ジャムツァラーノの引率により、ロシアのイルクーツクやキャフタの学校へ派遣されている。ボグド・ハーン政権下のモンゴルでは、清末の書記養成所の教育内容や目的を参考にしつつ、附属学校を基礎として、公立学校を設置するなど徐々に法制度を整備していったという。地方の学校では、旧来の書記が教師としての役割を果たしたことも指摘される。

終章では、本書で検証した清代モンゴルにおける書記、および書記制度の意義を総括するとともに、彼らが近代モンゴル社会と政治、そして文化を支える存在であったことが強調される。また、今後の課題として、内モンゴルの事例研究が重要な課題となることも示唆されている。なお、巻末には、著者が集めた文書史料のアルファベット転写と翻訳が掲載されており、有用である。

以上が本書の概要である。本書は専門書でありながらも、著者が読み解く史料のなかに、生き生きとしたモンゴル人の姿が浮かび上がり、読み手の関心を引きつけることに成功している。読者であるわれわれは、一般的なモンゴルのイメージとは異なる生真面目な書記たちの有り様と、その後モンゴル社会のたどった道のりとを、対比させながら読み進めることができるのである。

つぎに筆者なりに本書の持つ意義についてまとめておきたい。第一は、モンゴルにおける官吏と知識人階級のありかたに光を当てた点であろう。筆者も含め、モンゴルの革命史に親しんだものであれば、近現代史に登場する知識人や革命家の多くが、書記や下級役人であったことを思い出すに違いない。しかしながら、日本や中国のように「紳士録」といった類いの書籍がないため、ボグド・ハーン政権期の官吏たちがいったいどのような経歴を持つのか、今もってわからないことが多く残されている。本書を読み進めれば、まず20世紀初めにモンゴルで活躍した官吏たちのバックグラウンドを理解することができる。また、知識人階級でもある書記たちがこれまで積み上げた実務経験を生かして、激動するモンゴルの政治体制のなかで、徐々に台頭したこと、そして書記養成制度が近代教育の基盤となっていることも指摘され、その重要性が一層明らかにされる。本書によって書記たちが、モンゴル社会を下支えした重要な存在であったことがわかるだろう。

第二は、遊牧地域であるハルハ・モンゴルにおける書記と、その人材養成のありかたを明らかにした点である。時代は下るが、農耕化が進む内モンゴルの近代的学校として、よく知られているのはハラチン右旗の崇正学堂である。旗のジャサグであるグンサンノロブは、清末に学校建設を進めるために、王府の土地を農民に開墾させ、学校の建設費用に充てていた。一方、本書に示されるように、遊牧を主な生業とするハルハ・モンゴルでは、人材養成や学校設立にさいして盟や旗などに寄付を求めたことが指摘される。このことは、土地税や、土地という資産を持たない遊牧地域のモンゴルにおいて、いかにして人材養成を進めようとしたのか示しており、興味深い。また本書が指摘するように、世襲王公が支配するモンゴル社会において、書記昇進制度は、身分によらない例外的な出世ルートであり、モンゴルの官僚制度のありかたを考えるうえで重要な視点を与えてくれる。

第三点として、これは本書の主題ではないが、筆者にとっては、ハルハ・モンゴルの盟の役所の文書管理に関する記述が興味深く感じられた（第3章）。本書では、ハルハ・モンゴルのトシェート・ハン部の場合、盟長の親戚宅付近に盟のゲル（モンゴルの移動式住居）が置かれ、盟の役所が固定的でなかったことが記される。盟の役所は旗と同様、ゲルに置かれ、

そこで書記たちが文書を処理し、膨大な文書が蓄積されたことが明らかにされるなど、遊牧社会特有の行政機構の姿が描き出される。なお、モンゴル関係の文書史料にかんして、ハルハ・モンゴルでは盟衙門の文書史料が残されているのに対し、内モンゴル各盟の場合、史料の存在そのものが現在のところ確認できない。しかしながら内モンゴルの場合、清代や民国時代の旗の文書や省の文書のなかには、盟と交わした文書がいくつか含まれている。それゆえ内モンゴルでも盟の文書が存在したことは間違いなく、上記の事例から考えれば、内モンゴルの盟の文書も盟長を務めたジャサグの本拠付近に保管されていたと推測されるのである。

以上、筆者の関心に従い、本書の内容と成果について簡単に紹介をおこなった。近現代モンゴル史、および清朝史に関心のあるものであれば、本書から多くの知識や刺激を得られることは間違いのないであろう。このような著作が日本語で出版されたことにおおいに感謝したい。著者はモンゴル国中央文書館の文書の海のなかから丹念に史料をすくい上げ、それらをていねいに読み解くことで、清代から近代にいたるハルハ・モンゴル社会の秩序の一端を解明した。その手法は今後多くの研究に生かされるであろう。あとがきにもあるように、今後、シーリン氏が、内モンゴルをも視野にいれつつ、さらに新しい分野を開拓されることに期待したい。

シーリン『清代外モンゴルにおける書記および書記の養成に関する研究（清末蒙古胥吏研究）』内モンゴル人民出版社、フフホト、2015年、iii + 251頁。